セミナー
かたってみよう！まちづくり

「くまにち すぱいす」に隔週で掲載された「まちづくり探検隊」では、紙面を通して熊本市のまちづくりに興味を持ってもらうだけでなく、その関心を実際の行動(地域での活動)に移してもらうための知識と実践を学ぶセミナーを全4回開催しました。各回の内容と学びのポイントを、ダイジェストで紹介します！

第1回 どう守る？ 子どもの安全

親だけでは難しい子どもの見守りに〝地域の力〟を活用！

1「子どもの安全」という関心の高いテーマだけに参加者の意識も高く、活発に意見が交わされました 2各テーブルでは自己紹介も兼ねて、それぞれに自分も意見を出し合っていきます 3発表に向けて話し合いを進める各テーブルを回り、アドバイスをする水野さんと荒木さん

7月8日、熊本日日新聞社・本館2階ホールで開催したセミナー「かたってみよう！ まちづくり」。事前に申し込みいただいた約30人に加え、地域づくりについて研究している熊本大法学部・伊藤ゼミの学生8人も参加してくれました。

この日のテーマは、「どう守る？ 子どもの安全」。近年、子どもが犠牲となる悲しい事件が頻発しています。そうした子どもを取り巻く環境の変化や危険に親はどう対処すればいいのでしょうか。

地域の防災・防犯などに詳しい水野直樹さん(スタディライフ熊本理事)を講師に迎え、最近の子どもが巻き込まれる事件の傾向などについて話を聞いた後、5～6人のグループに分かれてワークショップを行いました。

ワークショップには、セミナーを主催した熊本市の職員も参加。「子どもを犯罪から守るために親にできること」について皆で意見やアイデアを出し合った一方で、「親だけでは見守ることができない時間がある」という課題も見つかりました。それに対処する一つの手段として挙がったのが、「地域ぐるみでの見守り」。昔ながらの〝向こう三軒両隣〟の精神や、熊本地震で重要性を再認識した〝地域の絆〟を、子どもの安全を守るためにも生かそうというものです。

セミナーやワークショップで得た情報や知識を活用して、参加者が今後どのように地域と関わっていくのでしょうか。「まちづくり探検隊」では、皆さんの「これから」にも注目していきます！

ワークショップから見えてきた！ 子どもの安全を守るために“地域”にできること

ワークショップを通して、子どもを守る上で必要なキーワードを上げ、そこから「子どもの安全を守るためにできること」の具体的なアイデアを出し合っていきました。皆さんも、自分の住む地域ですぐに実践できることばかりですよ！

積極的なあいさつを！

あいさつは不審者に対しての「監視」の意味もあります。目を見てあいさつされると、不審者は「顔を認識された」と思います。登下校時の子どもだけでなく、大人同士が積極的にあいさつを交わしましょう！

地域の“有名人”に！

特に子どもの多い校区などでは、地域の人に子どもの顔を覚えてもらうのも大変。そこで、親が地域の有名人になれば、「あ～、○○さん家の子」と認識され、登下校中なども意識して見てくれます。それには親が地域のために何ができるのかを考え、行動することが大切です。

地域の整理・整頓・清潔・清掃

不審者が嫌うのは「地域の団結」。それは、町内の掲示板やごみステーションにも表れます。「古い掲示物がそのままになっていないか？」「ごみステーションが散らかっていないか？」を今一度確認してみましょう。

第2回 考えよう！ 身近な防災Part.1

地域防災の事例と地域版ハザードマップ作りを学ぶ

1事例発表、ハザードマップ作りと盛りだくさんの内容に参加者の満足度も大！ 2予定の時間をオーバーするほど白熱したフリーディスカッション。3人それぞれの思いが参加者の防災意識向上につながりました 3ハザードマップを見ながら自分の住む地域の危険度をチェックする親子

9月9日、熊本日日新聞社・本館2階ホールで開催したセミナー「かたってみよう！ まちづくり」。

今回のセミナーは、「考えよう！ 身近な防災」のテーマに約20人の参加がありました。熊本地震という大災害を経験し、誰もが災害への備えの大切さを痛感しました。しかし、いざ「何かしなければ」と思っても、どのような準備や心構えをすればいいのか「分からない」という人も少なくありません。

そこでセミナーでは、今回から3回シリーズで、身近な防災を考える上で欠かせない要素の一つ「ハザードマップ」を作り、それをどう生かすかを学ぶことにしました。

「パート・1」の今回は、2部に分けて展開。第1部は、託麻原小PTA会長の漆野和也さんと、熊本市消防団(慶徳校区)・第15分団の山内要さんによる事例発表を行いました。地域で取り組んでいる防災活動の実例や、熊本地震の教訓を生かした防災のアドバイスなど興味深い話題に、参加者はメモを取りながら聞き入っていました。

さらに、セミナーの講師・ファシリテーターを務める水野直樹さんを交えたフリーディスカッションでも熱い意見が交わされ、事例発表と併せて、改めて「防災」への意識を高めるきっかけやヒントを得る機会になりました。

第2部のワークショップでは、テーマの柱であるハザードマップの重要性と、その作り方について水野さんが説明。「ハザードマップを見るのも、作るのも初めて」という参加者が多く、「パート・2」で予定しているフィールドワーク実際に地域を巡りハザードマップに落とし込む危険箇所を調べるに向けて、いい予行演習になったようです。

地域での防災の取り組み ～事例発表～

将来は地域の防災を担う人材に

託麻原小学校PTA会長 漆野和也さん

託麻原小(中央区)では、同小PTA主催で1泊2日の「防災キャンプ」を、校内の教室やプールを使って実施し、5～6年生43人が参加しました。「防災の知識や情報を学び、子どもたちが自分で身を守れるようになること」「集団生活を通して自助・共助の大切さを知り、将来の地域防災を担う人材の育成」を目的に、心肺蘇生法をはじめ、AEDの取り扱い、応急担架の作成、着衣水泳、非常食調理などのほか、起震車体験も行いました。

「想定」を捨てて、非常時の備えを

熊本市消防団(慶徳校区)・第15分団 山内要さん

熊本地震の際は、地元・慶徳校区の消防団員として避難所運営に携わり、非常時に大切なさまざまなことを学びました。まず、「自己完結できる備え」。非常食など、3日分程度の備えがあれば、自宅が無事なら避難所に行かずに済みます。さらに、断水などに備えて簡易トイレを準備しておくこと。最後に、日頃から地域の中で安全な場所を探し、家族の間で避難する場所を2つ決めておくと、災害発生時に家族がバラバラでも安心です。

多世代が参加した実践的なマップ作成が好評

第3回 考えよう！身近な防災Part.2 ～地域を歩いてハザードマップを作ってみよう～

1 危険箇所や危険な理由、万一の場合の対処法などを中央区総務企画課の職員が説明 2 ハザードマップ作成後に感想を発表する大学生 3 用意されたA1サイズの大きな地図を使い地域版ハザードマップを作っていきます

12 月1日、熊本日日新聞社・本館2階ホールで開催した第3回セミナーでは、前回のセミナーで学んだ地域版ハザードマップの作り方を実践に移しました。

「地域にはどんな危険箇所があるのか？」「被災した時に役立つ場所は？」などの疑問点について、実際に歩いて確認するフィールドワークの後、そこで得た情報を地図に落とし込み地域防災に役立てるハザードマップを作成しました。

フィールドワークの前に、中央区総務企画課で地域と行政の防災体制強化の役割を担い、町内での地域版ハザードマップ作りを指導してきた佐藤立彦さんが、実際にまち歩きを行い、マップを作成する際の注意点などを説明。熊日本社周辺の地域を巡るまち歩きでは、普段何げなく通っている道や地域の地形に思わぬ危険が潜んでいるとの説明に、参加者も驚きを隠せない様子でした。

マップ作成では、「どうすれば実際の災害時に役立つものになるか」という視点で、地域の細かな情報まで書き込みました。

今回は、「いかに地域で防災に取り組むか」ということを、より実践的に学べる内容とあって、前回を上回る25人が参加。第1回から毎回参加している方やまちづくりに興味のある大学生など、「防災」というキーワードを通して集まった幅広い世代が互いに協力し、話し合いながらマップを作る中で、「地域のつながりを強くすることが災害に強いまちづくりにもつながる」との気付きを得たようです。

地域版ハザードマップ作成のポイント

町内単位で作成する地域版ハザードマップは、水害や地震といった災害の際に、自宅や職場、学校から避難場所へ移動する時に役立ちます。作成する上で重要なのは、日頃の生活の中では見えない、地域に潜む危険を“見える化”すること。ハザードマップに、どんな場所を落とし込めばいいかを確認し、実際に地域を歩きながらチェックしていきましょう。

フィールドワークの際に撮影した写真を地図上に貼付。危険箇所をよりイメージしやすくします

地域版ハザードマップに落とし込むポイントはココ！

- ■危険な場所／電線、墓地、歩道などの段差や傾斜、排水溝など
- ■役に立つ場所／避難場所(公園、公民館、広い空き地など)、コンビニ、公衆電話、消火栓など
- ■過去の経験を記載／過去の大雨、水害で冠水した場所など(一時的なものも含む)

地域版ハザードマップの活用法を参加者が〝企画〟

第4回 考えよう！身近な防災Part.3 ～地域版ハザードマップの活用法を考よう～

1 各グループのプレゼンテーションを聞きながらメモを取る人も 2 方向性や具体的な企画内容に迷ったグループには水野さんが入り、アドバイスやヒントを提供 3 水野さんは講演で、「地域ぐるみのイベントなどは住民同士の顔つなぎの機会になるだけでなく、地域の抱える問題の掘り起こしにも役立つ」と強調

1 月20日、熊本日日新聞社・本社4階会議室で開催した第4回セミナー。

今回は、シリーズの総仕上げとして、作った地域版ハザードマップを、「まちづくりに、どのように活用するか」を参加者に考えてもらうワークショップを実施。初めに、一般・学生合わせて17人の参加者を前に、講師・ファシリテーターを務める水野直樹さんが、市内各校区で実践されている「まちづくり」の実例や、それがもたらした地域への効果などを紹介しました。

その後のワークショップでは、参加者から挙がった「高齢者支援」「子どもたちの防犯」「多世代交流」「防災」の4つのテーマでグループに分かれ、それぞれのテーマと地域版ハザードマップを関連付けたイベントや地域ぐるみの取り組みの企画に挑戦。

各班のプレゼンテーションを聞いた水野さんからは、「実際に地域で実現できそうな企画ばかり」と驚きの声が上がるほど。4回のセミナーを通じて、まちづくりについて知り、それを自分の地域で実践することを学んだ皆さんの〝本気〟が感じられるセミナーとなりました。

4つのテーマで地域版ハザードマップの活用法を提案！

テーマ「高齢者支援」
お散歩に行こう！
誰もが暮らしやすい地域であるために、高齢者や障がい者が外出時に困らないよう、歩道や建物内の段差やエレベーター・エスカレーターの有無などが掲載されたマップを作成。

テーマ「多世代交流」
あなたの情報で町を救おう!!
地域で行われる夏祭りなどの場を利用して、住民から地域版ハザードマップ作成に必要な地域内の危険箇所などの情報を募り、より多くの人に作成に関わってもらう。

テーマ「子どもたちの防犯」
デンジャラススポットリサーチ
防犯上の危険箇所把握に加えて、地域に新たなつながりを作るために、子どもたちがゲーム感覚で参加できるイベントとして“まち歩き(危険箇所探し)”を行う。

テーマ「防災」
誰もが分かるハザードマップをまちづくりに生かす！
外国人の意見も取り入れた地域版ハザードマップを作成し、熊本市の観光情報などと一緒に、災害時に情報が不足しがちな在熊外国人や海外からの旅行者向けの情報発信を行う。